

令和6年度の校内研究について

2024. 5. 13 (月)

校内研究担当 (大室)

1 研究主題

仲間との関わりを通して、より深い学びを探究する弥栄っ子の育成
～学級活動における話し合い活動の充実を基盤とした実践～

2 主題設定の理由

本校では教育目標として「自他尊重」を掲げ、めざす児童像を「学び続ける子(知)…自分を高める努力を続ける子」「認め合う子(徳)…豊かなコミュニケーションで、相互理解を深める子」「健やかな子(体)…心身ともに健康な子」として、日々の教育活動に取り組んでいる。

本校の児童は素直で思いやりがあり、全体的に落ち着いた学校生活を送っている。規範意識も高く、やるべきことに真面目に取り組むことができる。しかし、少人数で教師の支援が行き届きやすい一方で、困難な課題に出合った時、乗り越えようとする力や、挑戦しようとする力が弱いという面がある。また、学級集団として見たときには、クラスの人数が少ないために多様なアイデアが出にくく、深い学びへと繋がりにくいということも課題として挙げられる。

本校の研究を振り返ると、一昨年度までの2カ年は算数科において、「主体的・対話的で深い学び」を通して高め合う児童の育成を目指して実践を重ねてきた。学習課題や学習スタイル、数学的表現を用いた表現の工夫をしたことで、仲間と支え合って高まろうとする姿勢が数多く見られるようになったことが成果として挙げられる。一方で、算数科に限らないが、様々なことに主体的に学びに向かう力には、依然として課題が残っていると考えられる。その課題を受けて昨年度から始めた特別活動の研究では、仲間との関わりを通して、自己や学級・学校集団をよりよくしていこうとする力を伸ばしたいと考え、実践を重ねてきた。

今年度は研究主題の中でも「より深い学び」の実現に焦点を当てたいと考える。深い学びの下支えとしては、「主体的な学び」と「協働(対話)的な学び」を両輪で回していくことが必要であるとされている。「主体的な学び」とは、文部科学省の定義によると「学ぶことに興味や関心をもち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる」(『個別最適な学び』と『協働的な学び』の一体的な充実)より)ことである。対象となる問題について自分事として捉え、自らに働きかけて問題を解決していこうとする経験を様々な場面で取り入れていくことが必要であると考え。このような営みは1時間の授業の中だけでなく、長いスパンでPDCAサイクルを回す中で高めていけるものであり、国語や算数の授業の中のみならず、学級活動(1)の学級や学校における生活づくりへの参画の指導を通して充実できるものと考え。「協働的な学び」については、浜田市教育委員会の学力向上推進室が提唱する「子どもの声でつくる授業」においても、その効果を高めるために、「学級経営を充実し、児童生徒が違いを認めて協力し合える学級づくりを進めることが必要である。例えば、学級活動(ホームルーム活動)で行われる合意形成の活動は、ほかの教科等での学習の質の向上にも有効であることを念頭に学級経営を充実することなどが考えられる。」とされている。教師の適切な導きの下で、集団による合意形成の過程を繰り返し経験することを通して、深い学びに向かう学習集団へと児童を育成することができると考える。

以上のことから、今年度の校内研究においては、学級活動における集団の合意形成の指導を充実させることで、主体的な学び、協働的な学びの質を向上させていき、深い学びへと向かう児童を育成することを目指していきたい。

3 研究主題の受け止め

① 「仲間との関わり」とは

仲間とは、一緒に物事をする間柄の人を示し、ここでは学校や学級、あるいはグループ等で一緒に活動したり学習したりする相手を指している。気が合ったり考え方が似ていたりする場合もあれば、そうでない場合もある。いずれにせよ、児童同士が同じ目的（ゴール）に向かって進んでいくためには、お互いの思いを感じ取ったり、伝え合ったりすることが必要不可欠である。仲間との関わりには、顔を見合わせて気持ちや考えを「伝え合う」こと、そこから合意形成に向かって「話し合い」をすること、話し合ったことを具体的に実践する中で「協働」すること等、様々な局面がある。関わりの中でぶつかり合ったり対立したりすることも多いが、経験を重ねることで折り合いのつけ方を学び、前向きに活動していこうとする意欲を高めていくことが期待できる。

② 「より深い学び」とは

「深い学び」については、2016年の中央教育審議会答申の中で、「各教科等の特質に応じた『見方・考え方』を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう『深い学び』と説明されている。「より」という言葉を付加したのは、説明の中にある「創造」したことを実践に結び付けていこうとするエネルギーを育てていきたいという教師集団の思いからであり、様々な課題や困難に挑戦しようとする意欲を高めたという願いを込めているという理由からである。

③ 「探求する」とは

「探求」とは、ものごとの意義や本質をさぐって見きわめようとする事、あるものごとの背後にある秘密や隠された意味などを調べて解き明かそうとすることである。それに対し同音の「探求」は、あるものを得ようとしてさがし求めること、所在の分からないあるものをさがして、手に入れようとすることを意味している。学習過程を説明するのに「探求」が用いられることが多いが、特別活動との関わりを大切にする研究の方向性を考えると、児童同士の「探求」の方がより近いと考え、この言葉を用いることとした。自ら主体的に対象と関わり、深い学びへと向かう姿を「探求」と捉える。

4 研究仮説

教科の学習や特別活動における、児童の関わり合いの指導の充実を図れば、主体的・協働的な学びの質が高まり、深い学びを実現できるであろう。

5 研究における具体的な手立て

① 学級活動（1）における合意形成の指導の充実

1. PDCA サイクルを短期、長期にまわしていくことで、問題を自分事として捉えられるようにする。
2. 合意形成の方法を指導する。

意見と理由を出す→意見を分類・整理する→賛成意見・反対意見を出し合う

→意見をまとめる→決める

- ② 協働的な学習により，より深い学びを得る学習集団の育成
1. 相手意識をもって話す習慣づくりをする
「話します」「ここまでいいですか?」「〇〇さんの考えに付け加えて」
 2. 話型指導に終始することなく，「守破離」の精神で指導を行い，自分の言葉で話す力をつける。
つまり・・・①型を示す ②「それ以外の言葉で言うと?」 ③型から離れて話せるようになる

6 研究の方法

○ 研究授業による実践的検証

担任の先生方には1つずつ授業を提供していただきます。基本的には学活の授業をしていただきますが，研究の視点によっては他教科の授業もよしとします。研究主任にご相談ください。

検証については，主体的，協働的な学びを高める教師の働きかけにより，深い学びへと向かう児童の姿があったかということで評価してください。対象となる児童が少ないので，量的な見取りは意味を成しません。具体的な児童の姿を記録して検証してください。

7 校内研究の年間計画

月	研究内容	備考
4月	学力向上の施策に関する研修	
5月	今年度の校内研究の方向性についての提案 研究構想に関する協議	
6月	市教委・事務所訪問指導（2年算数 大室）・授業研究会	授業改善
7月		
8月	学力向上に関する研修 今年度の全国学力調査の分析	講師あり
9月	校内研究授業（ ? ）・授業研究会	
10月 11月?	校内研究授業（3・4年学活 長谷川）・授業研究会	研究推進
10月	県教委・訪問指導（5・6年体育 山崎）・授業研究会	中堅研（11年目）
10月	校内研究授業（ ? ）・授業研究会	
11月	校内研究授業（ ? ）・授業研究会	
12月	校内研究授業（2年学活 大室）・授業研究会	
1月		
2月	今年度の研究のまとめ	
3月	次年度の研究の方向性に関する協議	